

中学一年生

ランドセルとの日々

佐野 百萌

それはまだ、私が幼稚園に通っていたころ。家族でランドセルを買いに出かけた。学校の様子をあれこれ考えながら選んでいた時、一つのランドセルに目が引き寄せられた。ピンク色のランドセル。その時が、私とランドセルとの出会いだった。入学式、真新しいランドセルを背負って学校へ行った。辺りを見回すと、みんなほとんど

ど赤色でピンクは二、三人しかいなかった。少し不安になったが先生も周りの人も優しくて安心した。その日から、私とランドセルの学校生活が始まった。晴れの日も雨の日も、どんな時でも一緒に登校、下校した。高学年になると教科書も増えて重くなったが、いつもがんばってくれていた。ランドセルがあったからこそ、楽しい学校生活が送れたと言っても過言ではない。そして月日が経ち、むかえた卒業式。その

日も一緒に登校した。もうこのランドセルを
背負って学校に行くのも今日が最後。そう思
うと涙が出そうになつた。卒業式が終わり家
に帰ると母にランドセルギフトの事を説明さ
れた。最初私は反対だつた。このままずつと持
つていることはできない。その事は分かつて
いた。しかし、六年間の思い出の詰まつたラ
ンドセルを、知らない人にあげるのはいやだ
つた。しかし、母と繰り返し話す内に考えが
変わった。教育が受けられない子供達に役立っ

ることができるとなら、きっとランドセルも喜ぶ
そう思えるようになったのだ。
ランドセルに伝えたい。六年間、本当にあ
りがとうございました。いつも私のことを見
守ってくれていて、本当に感謝しています。
アフガニスタンの子供達の役に立てあげて
下さい。あなたの事は絶対に忘れません。